

# Space Japan Book Review

衛星通信研究者が見た

Reviewer: 編集顧問 飯田尚志

新渡戸稲造, 矢内原忠雄訳: "武士道", 岩波文庫, No.青 118-1, 1938.  
Inazo Nitobe: "Bushido, The Soul of Japan", 1899, Merchant Books, 2009.

本欄では今回従来と違う話題として本書を取り上げてみた。最近、我が国ではいじめなど、弱者に対する暴力が益々ひどくなってきていると感ずるが、私は、武士道では「小さい子をいじめず、大きな子に背を向けなかった者という名を後に残したい」というのが基本精神だとの認識の下に本書を読んだ。本書は117年前に刊行され、かつ極めて有名な本であるので、書評といっても私などが書ける代物とは思われないが、ただ通信及び工学に携わる人が本書をどのくらい読んだことがあるのか興味がある。実は私が本書を知ったのは、「国家の品格」[1]を読んだからであり、本書は英語で書かれたものであることも知らなかったが、今回初めて初版に近い版を熟読した。宇宙開発に携わる我々は工学的素養に基づいて行動するので、論理的志向によって行動するわけだが、時として人間としての行動基準とか、判断基準としての精神の形、道徳によることが必要となることがあり、こういう情緒を育む精神の形として、日本人は古来、武士道を擁していること[1]に気付くことは有意義なことと思われ、本欄に本書を取り上げる意義があると考え。

本書の最初の日本語訳は1908年ということであるが、今回取り上げた本書は1938年に改めて遂行した翻訳であるとのことである。ただ、やや文語調の文体である。さらに、最近においても現代語訳の本も出版されており[2]、英語との対訳も出版されている[3][4]。

まず本書著者の新渡戸稲造は、1862年生まれ、1933年没で、札幌農学校卒、帝国大学（後の東京帝国大学）中退の教育者・思想家である。1884年、米国ジョーンズ・ホプキンス大学に私費留学。この頃までに稲造は伝統的なキリスト教信仰に懐疑的になっており、クエーカー派の集會に通い始め正式に会員となった。クエーカー達との親交を通して後に妻となるメアリー・エルキントン（日本名・新渡戸万里子）と出会う。著書 "Bushido: The Soul of Japan" は、流麗な英文で書かれ、1900年にその初版が刊行されると、やがてドイツ語、フランス語など各国語に訳されベストセラーとなり、セオドア・ルーズベルト大統領らに大きな感銘を与えたという。帰国後、第一高等学校校長、帝国大学教授、国際連盟事務次長、東京女子大学初代学長を務めた[5]。訳者の矢内原忠雄は1893年生まれ、1961年没、1917年東京帝国大学法科大学政治学科卒の経済学者・植民政策学者。東京大学総長、日本学士院会員。無教会派キリスト教の指導者としても知られる[6]。

本書執筆の動機は、新渡戸がベルギーの法学大家ド・ラヴレーから「日本の学校には宗教教育はないというなら、宗教なしで、どうして道徳教育を授けるのか」と質問され、新渡戸はこれに即答できなかったこと。また、直接の端緒は、新渡戸の妻が、日本であまねく行き渡っている思想・風習は何を根拠としているのかとしばしば質問したことによる。新渡戸はド・ラヴレーならびに彼の妻に満足な答えを与えようと試みたことが本書著述の動機であるとのことである。

本書は、騎士道、キリスト教、その他多くの哲学思想を踏まえながら武士道とそのポジションを明らかにしている。武士道を、道徳体系、その根源、義、勇気、仁、礼、信と誠、名誉、忠義、教育、克己（こっき、自分に打ち勝つこと）、切腹と敵討、刀、というように連続した概念の下に記述していき、さらに女性の教育、武士道の影響、及び将来について思索を進め、スケールの大きな考察となっている。私には難解なところもあるので、以下では、私の印象に残った部分を列挙していくこととする。

武士道は文章に規定されたものではなく、過去700年（1900年から数えて）にわたって蓄積してきた不文律として成立しているということである。武士道は武士が守るよう要求され、教えられた道徳の掟（おきて）である。元々は戦士として守るべきこと、後に封建制度における最上位の侍の気構えとなったものである。本書ではその基本思想として、まず挙げられる仏教は、運命に任ずという平静な感覚、不可避に対する静かなる服従、危険災禍に直面してのストイック的沈着、生を賤しみ死を親しむ心を武士道に対して寄与した。また、仏教で与えられなかった、主君に対する忠誠、祖先に対する尊敬、ならびに親に対する孝行が神道で叶えられた。これによって武士の傲慢な性格に服従性が与えられた。さらに、道徳的教義に関して、孔子の教訓が武士道の最も豊富な根源であった。君臣、父子、夫婦、兄弟ならびに友人の關係の五つの道徳的関係（五倫の道）を与えた。

「勇気」に関して、「勇気とは正しいことをすることである」としている。あらゆる種類の危険をおかし、自分の命を賭けるような行為が勇敢だと考えられることが多いが、武士道の教えでは違っており、死ぬべき価値のない理由で死ぬのは、「犬死」とされた。本当に勇敢な人は常に平静である。江戸城の偉大な創建者である太田道灌が槍で刺された時、彼が歌を好むことを知っていた刺客は、刺しながら次のように上の句を詠んだ。

「かかる時さこそ命の惜しからめ」。これを聞いてまさに息絶えようとしている英雄は、脇の致命傷にも少しもひるまず、「かねてなき身と思ひ知らずば」と下の句を続けたということである。

「仁」に関しては、人を治める者の最高の必要条件は仁に存するということが繰り返されている。その中で、弱者、劣者、敗者に対する仁は、最も高い徳として称賛された。歌舞伎として有名な「一谷嫩軍記(いちのたにふたばぐんぎ)～熊谷陣屋」の熊谷直実がまだ若き平敦盛を討ち取り、その後出家した話が記載されている。

「誠」に関しては、嘘やごまかしは、ともに卑怯とみなされた。「武士の一言」と言われるように、武士の言葉には重みがあり、その約束は一般に証文なしで結ばれ、かつ履行された。「教育」に関しては、武士の教育で重視された第一の点は人格の形成であった。

「刀」に関しては、武士道は刀をその身分と武勇の標章とした。ここで、やゝ余談であるが、この章の冒頭に書かれている文章の意味が理解できなかった。私の浅学のためと思われるが、どなたか教えて頂ければと思う。

終章部分において武士道の現状と将来に関して述べられている。以下では、その概要を紹介する。武士道として結実した倫理体系は時が経つに従って大衆からも追従者と呼ばれ込んだ。我が国に怒濤のように侵入してきた西洋文明は、既に古くからの訓育の痕跡を残らず洗い流してしまったのかどうか論じられている。もし一国民の魂が、それほど早く死滅するものだとすれば悲しいことである。外からの影響にそんなにも簡単に屈服するとしたら、貧弱な魂である。日本人の身体にあふれる忍耐強さ、不撓不屈の精神、勇敢さは、日清戦争によって十分証明された。武士道の将来については、もし歴史がくり返すものならば、武士道の運命が、騎士道の運命を踏襲することは確実である。現代の整備された軍隊組織が武士道を保護下に置くかもしれないが、現代戦争には武士道を継続的に成長させる余地がない。勢力を増すデモクラシーの大きな潮流だけでも、武士道の名残を呑み込んでしまう力がある。デモクラシーは、いかなる形式、いかなる形態の独占集団をも認めない。しかし、武士道は、知性と教養という資本を排他的に所有する人びとによって組織され、道徳の等級や価値を定める一個の独占集団だった。人間の内にある戦闘本能は、普遍的で自然なものであり、高尚な感情や男らしい美徳を生み出すものであったけれども、それが人間全体であるわけではない。戦闘本能の内には、より神聖な本能、すなわち愛がひそんでいる。現在のわれわれの使命は、この遺産を守って古い精神を損なわないことであり、未来における使命は、人生のすべての行動と諸関係に応用していくことである。封建日本の道徳体系は、その城郭や武器のように崩壊して塵となり、新しい道徳が新生日本の進歩の道を導くために不死鳥のように甦ると予言されてきた。武士道は、完全に絶滅することが武士道の運命ではありえない。体系としては死んだが、美徳としては生きていと結んでいる。

本書は日清戦争を終えたばかりの時期に書かれたものであるが、海外の識者の引用や述べられている事項について、少しも古いという感じを持たなかったのは、この本の主題が非常に程度の高いものであるためであろう。本書が執筆される少し前(1890年)に、我が国では教育勅語が発布されているのだが、本書では教育勅語については全く触れられていない。このことも、本書の論点が古いものと感じない要因なのであろうか。

我が国ではいじめなど、弱者に対する暴力が益々ひどくなってきていると感ずると前述したが、この意味で武士道が必要かという論調に「武士道は統治者の考え方」であるから反対であるとする記事がある[7]。文献[1]では戦前の日中戦争は弱者を侵略するというのは、武士道精神に照らし合わせれば、これはもっとも恥ずかしい、卑怯なことであるとしている。武士道の「いつでも失わぬ他者への哀れみの心」こそサムライに似つかわしく、弱者や敗者への「仁」であり、「武士の情け」の精神を近隣国への外交に活用すべきとする主張もある[8]。さらに、直近の日本経済新聞には若手俳優が武士道に影響されたという記事が掲載されている[9]。なお、仁の思想は孔子の思想とのことであるが、孔子を少しでも知るために小説があることを付記する[10]。

#### 参考文献

- [1] 藤原正彦: "国家の品格", 新潮新書, No.141, 2005.
- [2] 新渡戸稲造, 山本博文訳: "現代語訳 武士道", ちくま新書, 2010.
- [3] 新渡戸稲造, 増澤史子英語解説: "英語で読む武士道", IBCパブリッシング株式会社, 2012.
- [4] 新渡戸稲造, 奈良本辰也訳: "ビジュアル版 対訳 武士道", 三笠書房, 2016.
- [5] <https://ja.wikipedia.org/wiki/新渡戸稲造>
- [6] <https://ja.wikipedia.org/wiki/矢内原忠雄>
- [7] 浅川澄一: "インタビュー 領空侵犯 北海道大学教授 山岸俊男氏 武士道よりも商人道を 相手と利益を分かち合う", 日本経済新聞(朝刊), Apr.28, 2008.
- [8] "社説 2006 謹賀新年 武士道をどう生かす", 朝日新聞(朝刊), Jan.1, 2006.
- [9] 大野琢朗: "夕刊文化 読書日記 『武士道』努力続けよと鼓舞された", 日本経済新聞(夕刊), Dec.15, 2016.
- [10] 井上 靖: "孔子", 新潮社, 1998